

1

解答解説のページへ

実数係数の 4 次方程式 $x^4 - px^3 + qx^2 - rx + s = 0$ は相異なる複素数 $\alpha, \bar{\alpha}, \beta, \bar{\beta}$ を解にもち、それらはすべて複素数平面において、点 1 を中心とする半径 1 の円周上にあるとする。ただし、 $\bar{\alpha}, \bar{\beta}$ はそれぞれ α, β と共役な複素数を表す。

- (1) $\alpha + \bar{\alpha} = \alpha\bar{\alpha}$ を示せ。
- (2) $t = \alpha + \bar{\alpha}, u = \beta + \bar{\beta}$ とおく。 p, q, r, s をそれぞれ t と u で表せ。
- (3) 座標平面において、点 (p, s) のとりうる範囲を図示せよ。

2

解答解説のページへ

$0 < b < a$ とする。 xy 平面において、原点を中心とする半径 r の円 C と点 $(a, 0)$ を中心とする半径 b の円 D が 2 点で交わっている。

- (1) 半径 r の満たすべき条件を求めよ。
- (2) C と D の交点のうち y 座標が正のものを P とする。 P の x 座標 $h(r)$ を求めよ。
- (3) 点 $Q(r, 0)$ と点 $R(a-b, 0)$ をとる。 D の内部にある C の弧 PQ , 線分 QR , および線分 RP で囲まれる図形を A とする。 xyz 空間において A を x 軸のまわりに 1 回転して得られる立体の体積 $V(r)$ を求めよ。ただし、答えに $h(r)$ を用いてもよい。
- (4) $V(r)$ の最大値を与える r を求めよ。また、その r を $r(a)$ とおいたとき、 $\lim_{a \rightarrow \infty} (r(a) - a)$ を求めよ。

3

解答解説のページへ

- (1) 方程式 $e^x = \frac{2x^3}{x-1}$ の負の実数解の個数を求めよ。
- (2) $y = x(x^2 - 3)$ と $y = e^x$ のグラフの $x < 0$ における共有点の個数を求めよ。
- (3) a を正の実数とし、関数 $f(x) = x(x^2 - a)$ を考える。 $y = f(x)$ と $y = e^x$ のグラフの $x < 0$ における共有点は 1 個のみであるとする。このような a がただ 1 つ存在することを示せ。

4

解答解説のページへ

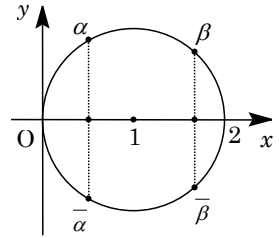
n を正の整数とし、 n 次の整式 $P_n(x) = x(x+1)\cdots(x+n-1)$ を展開して $P_n(x) = \sum_{m=1}^n {}_nB_m x^m$ と表す。

- (1) 等式 $\sum_{m=1}^n {}_nB_m = n!$ を示せ。
- (2) 等式 $P_n(x+1) = \sum_{m=1}^n ({}_nB_m \cdot {}_mC_0 + {}_nB_m \cdot {}_mC_1 x + \cdots + {}_nB_m \cdot {}_mC_m x^m)$ を示せ。ただし、 ${}_mC_0, {}_mC_1, \dots, {}_mC_m$ は二項係数である。
- (3) $k = 1, 2, \dots, n$ に対して、等式 $\sum_{j=k}^n {}_nB_j \cdot {}_jC_k = {}_{n+1}B_{k+1}$ を示せ。

1

問題のページへ

- (1) 実数係数の 4 次方程式 $x^4 - px^3 + qx^2 - rx + s = 0 \cdots \cdots \textcircled{1}$ の相異なる解 $\alpha, \bar{\alpha}, \beta, \bar{\beta}$ は、複素数平面において、点 1 を中心とする半径 1 の円周上にあるので、 $|\alpha - 1| = 1$ より、



$$|\alpha - 1|^2 = 1, (\alpha - 1)(\bar{\alpha} - 1) = 1$$

よって、 $\alpha + \bar{\alpha} = \alpha\bar{\alpha} \cdots \cdots \textcircled{2}$

- (2) (1)と同様にして、 $\beta + \bar{\beta} = \beta\bar{\beta} \cdots \cdots \textcircled{3}$

さて、 $\textcircled{1}$ の解について、 $t = \alpha + \bar{\alpha}, u = \beta + \bar{\beta}$ とおくと、 $\textcircled{2}\textcircled{3}$ より、

$$\begin{aligned} x^4 - px^3 + qx^2 - rx + s &= (x - \alpha)(x - \bar{\alpha})(x - \beta)(x - \bar{\beta}) \\ &= \{x^2 - (\alpha + \bar{\alpha})x + \alpha\bar{\alpha}\}\{x^2 - (\beta + \bar{\beta})x + \beta\bar{\beta}\} = (x^2 - tx + t)(x^2 - ux + u) \\ &= x^4 - (t + u)x^3 + (t + tu + u)x^2 - 2tux + tu \end{aligned}$$

よって、 $p = t + u, q = t + tu + u, r = 2tu, s = tu$ である。

- (3) まず、 $\textcircled{1}$ の解は $\alpha \neq \bar{\alpha}, \beta \neq \bar{\beta}$ からすべて虚数であり、しかも $\alpha \neq \beta, \alpha \neq \bar{\beta}$ から $\frac{\alpha + \bar{\alpha}}{2} \neq \frac{\beta + \bar{\beta}}{2}$, すなわち $t \neq u$ となる。さらに、 $0 < \frac{\alpha + \bar{\alpha}}{2} < 2, 0 < \frac{\beta + \bar{\beta}}{2} < 2$ から、 $0 < t < 4, 0 < u < 4$ である。

そこで、(2)から $t + u = p, tu = s$ なので、 t と u は、 X についての 2 次方程式 $X^2 - pX + s = 0$ の異なる 2 実数解となり、ともに 0 より大で 4 より小である。

さて、 $f(X) = X^2 - pX + s = \left(X - \frac{p}{2}\right)^2 - \frac{p^2}{4} + s$ とおくと、

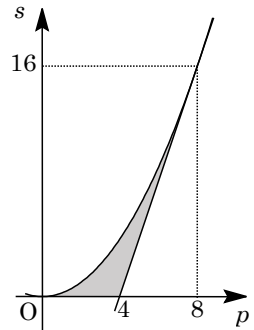
$$0 < \frac{p}{2} < 4 \cdots \cdots \textcircled{4}, -\frac{p^2}{4} + s < 0 \cdots \cdots \textcircled{5}$$

$$f(0) = s > 0 \cdots \cdots \textcircled{6}, f(4) = 16 - 4p + s > 0 \cdots \cdots \textcircled{7}$$

$\textcircled{4} \sim \textcircled{7}$ をまとめると、

$$0 < p < 8, 0 < s < \frac{p^2}{4}, s > 4p - 16$$

これより、点 (p, s) のとりうる範囲は、右図の網点部である。ただし、境界は領域に含まない。



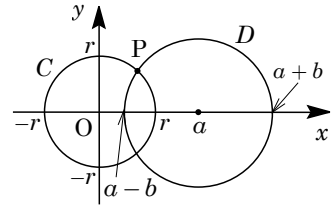
[解説]

複素数と方程式の問題です。(2)は解と係数の関係で処理するよりは、いったん 2 次式の積として計算する方が簡単です。

2

問題のページへ

- (1) $0 < b < a$ のとき、円 $C: x^2 + y^2 = r^2 \dots\dots ①$ と円 $D: (x-a)^2 + y^2 = b^2 \dots\dots ②$ が 2 点で交わる条件は、
 $|r-b| < a < r+b \dots\dots ③$



すると、 $|r-b| < a$ から $b-a < r < b+a$ であるが、
 $0 < b < a$ なので $r < b+a$ となる。

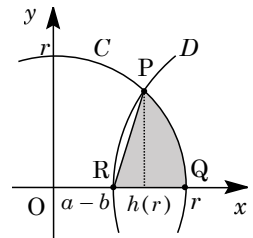
また、 $a < r+b$ から $a-b < r$ となる。

よって、 r の条件は、③から $a-b < r < a+b$ である。

- (2) ①②の両辺の差をとると、 $2ax - a^2 = r^2 - b^2$ より $x = \frac{r^2 + a^2 - b^2}{2a}$

これより、交点 P の x 座標を $h(r)$ とすると、 $h(r) = \frac{r^2 + a^2 - b^2}{2a} \dots\dots (*)$

- (3) 右図の網点部 A を x 軸のまわりに 1 回転して得られる立体の体積を $V(r)$ とし、 $h(r) = p$ とおくと、



$$V_1(r) = \frac{1}{3}\pi(r^2 - p^2)(p - a + b)$$

$$= \frac{1}{3}\pi\{-p^3 + (a-b)p^2 + r^2p - (a-b)r^2\}$$

$$V_2(r) = \pi \int_p^r (r^2 - x^2) dx = \pi \left[r^2x - \frac{x^3}{3} \right]_p^r$$

$$= \pi \left(r^3 - r^2p - \frac{1}{3}r^3 + \frac{1}{3}p^3 \right) = \frac{1}{3}\pi(2r^3 - 3r^2p + p^3)$$

すると、 $V(r) = V_1(r) + V_2(r)$ なので、

$$V(r) = \frac{1}{3}\pi\{-p^3 + (a-b)p^2 + r^2p - (a-b)r^2\} + \frac{1}{3}\pi(2r^3 - 3r^2p + p^3)$$

$$= \frac{1}{3}\pi\{(a-b)p^2 - 2r^2p - (a-b)r^2 + 2r^3\}$$

$$= \frac{1}{3}\pi\{(a-b)(h(r))^2 - 2r^2h(r) - (a-b)r^2 + 2r^3\}$$

- (4) $V'(r) = \frac{1}{3}\pi\{2(a-b)h(r)h'(r) - 4rh(r) - 2r^2h'(r) - 2(a-b)r + 6r^2\}$

(*)より、 $h(r) = \frac{r^2 + a^2 - b^2}{2a}$ から $h'(r) = \frac{r}{a}$ となり、

$$V'(r) = \frac{1}{3}\pi\left\{\left(\frac{2ar - 2br - 4r}{a}\right) \cdot \frac{r^2 + a^2 - b^2}{2a} - \frac{2r^3}{a} - 2(a-b)r + 6r^2\right\}$$

$$= -\frac{\pi r}{3a^2}\{(a+b)(r^2 + a^2 - b^2) + 2ar^2 + 2a^2(a-b) - 6a^2r\}$$

$$= -\frac{\pi r}{3a^2}\{(3a+b)r^2 - 6a^2r + (a-b)(3a^2 + 2ab + b^2)\}$$

$$= -\frac{\pi r}{3a^2}\{(3a+b)r - (3a^2 + 2ab + b^2)\}\{r - (a-b)\}$$

これより、 $V'(r)=0$ の解は、 $r=a-b$ 、 $\frac{3a^2+2ab+b^2}{3a+b}$ となる。

そして、 $a-b < r < a+b$ において、

$$\frac{3a^2+2ab+b^2}{3a+b} - (a-b) = \frac{4ab+2b^2}{3a+b} > 0, \quad a-b < \frac{3a^2+2ab+b^2}{3a+b}$$

$$\frac{3a^2+2ab+b^2}{3a+b} - (a+b) = \frac{-2ab}{3a+b} < 0, \quad \frac{3a^2+2ab+b^2}{3a+b} < a+b$$

以上より、 $V(r)$ の増減
は、右表のようになり、
 $r = \frac{3a^2+2ab+b^2}{3a+b}$ のとき
最大値をとる。

r	$a-b$...	$\frac{3a^2+2ab+b^2}{3a+b}$...	$a+b$
$V'(r)$	0	+	0	-	
$V(r)$		↗		↘	

これより、 $r(a) = \frac{3a^2+2ab+b^2}{3a+b}$ となり、

$$\lim_{a \rightarrow \infty} (r(a) - a) = \lim_{a \rightarrow \infty} \left(\frac{3a^2+2ab+b^2}{3a+b} - a \right) = \lim_{a \rightarrow \infty} \frac{ab+b^2}{3a+b} = \frac{b}{3}$$

[解説]

微分と増減の問題ですが、量的にすさまじいものがあります。ただ、方針に迷うことはないのですが。

3

問題のページへ

(1) 方程式 $e^x = \frac{2x^3}{x-1}$ ($x < 0$) ……①に対して, $(x-1)e^x - 2x^3 = 0$

ここで, $g(x) = (x-1)e^x - 2x^3$ とおくと, ①は $g(x) = 0$ となり,

$$g'(x) = e^x + (x-1)e^x - 6x^2 = xe^x - 6x^2 = x(e^x - 6x)$$

$x < 0$ において, $6x < 0 < e^x$ から $g'(x) < 0$ となるので, $g(x)$ は単調に減少し,

$$g(0) = -e^0 = -1, \quad g(-1) = -2e^{-1} + 2 = 2(1 - e^{-1}) > 0$$

よって, ①の実数解の個数は 1 個である。

(2) $y = x(x^2 - 3)$ と $y = e^x$ のグラフの $x < 0$ における共有点の個数は, 方程式 $e^x = x(x^2 - 3)$ ($x < 0$) ……②の実数解の個数に対応する。

②より, $\frac{e^x}{x} = x^2 - 3$ すなわち $\frac{e^x}{x} - x^2 + 3 = 0$ として, $h(x) = \frac{e^x}{x} - x^2 + 3$ とおく。

$$h'(x) = \frac{xe^x - e^x}{x^2} - 2x = \frac{x-1}{x^2}e^x - 2x = \frac{1}{x^2}\{(x-1)e^x - 2x^3\} = \frac{g(x)}{x^2}$$

そこで, ①の実数解を $x = \alpha$ とおくと, $-1 < \alpha < 0$ であり, これより $x < 0$ における $h(x)$ の増減は右表のようになり,

x	…	α	…	0
$h'(x)$	+	0	-	
$h(x)$	↗		↘	

$$\lim_{x \rightarrow -\infty} h(x) = -\infty, \quad \lim_{x \rightarrow 0} h(x) = -\infty$$

さらに, $h(-1) = -e^{-1} - 1 + 3 = 2 - e^{-1} > 0$ から, $h(\alpha) > h(-1) > 0$ である。

したがって, $h(x) = 0$ ($x < 0$), すなわち②の実数解は 2 個となり, 求める共有点の個数は 2 個である。

(3) $a > 0$ のとき $f(x) = x(x^2 - a)$ に対して, $y = f(x)$ と $y = e^x$ のグラフの $x < 0$ における共有点が 1 個であるのは, (2)と同様にして, $e^x = x(x^2 - a)$ ($x < 0$) ……③の実数解が 1 個に対応する。

③より, $\frac{e^x}{x} - x^2 + a = 0$ として $H(x) = \frac{e^x}{x} - x^2 + a$ とおくと, $h(x)$ と同様に, $H(x)$ は $x = \alpha$ で極大値をとるので, ③の実数解が 1 個の条件は $H(\alpha) = 0$ となり,

$$\frac{e^\alpha}{\alpha} - \alpha^2 + a = 0, \quad a = \alpha^2 - \frac{e^\alpha}{\alpha} \dots\dots\dots ④$$

そして, $g(\alpha) = 0$ から $e^\alpha = \frac{2\alpha^3}{\alpha-1}$ となり, ④から,

$$a = \alpha^2 - \frac{1}{\alpha} \cdot \frac{2\alpha^3}{\alpha-1} = \alpha^2 - \frac{2\alpha^2}{\alpha-1} = \alpha^2 \cdot \frac{\alpha-3}{\alpha-1} > 0$$

よって, $x < 0$ における③の実数解が 1 個になる正の実数 a はただ 1 つ存在する。

[解説]

微分の応用の問題です。(2)で(1)をどのように利用するかが鍵になっています。

4

問題のページへ

(1) $P_n(x) = x(x+1)\cdots(x+n-1)$ を展開して, $P_n(x) = \sum_{m=1}^n {}_nB_m x^m$ とおくと,

$$\sum_{m=1}^n {}_nB_m = P_n(1) = 1 \cdot 2 \cdots n = n!$$

(2) $P_n(x+1) = \sum_{m=1}^n {}_nB_m (x+1)^m$ に対して, 二項定理を適用すると,

$$\begin{aligned} P_n(x+1) &= \sum_{m=1}^n {}_nB_m ({}_mC_0 + {}_mC_1 x + \cdots + {}_mC_m x^m) \\ &= \sum_{m=1}^n ({}_nB_m \cdot {}_mC_0 + {}_nB_m \cdot {}_mC_1 x + \cdots + {}_nB_m \cdot {}_mC_m x^m) \end{aligned}$$

(3) $P_{n+1}(x) = \sum_{m=1}^{n+1} {}_{n+1}B_m x^m$ から, ${}_{n+1}B_{k+1}$ は $P_{n+1}(x)$ の展開式の x^{k+1} の係数である。

さて, $P_{n+1}(x) = x(x+1)\cdots(x+n-1)(x+n) = xP_n(x+1)$ なので, (2) から,

$$\begin{aligned} xP_n(x+1) &= x \sum_{m=1}^n {}_nB_m ({}_mC_0 + {}_mC_1 x + \cdots + {}_mC_m x^m) \\ &= \sum_{m=1}^n {}_nB_m ({}_mC_0 x + {}_mC_1 x^2 + \cdots + {}_mC_m x^{m+1}) \end{aligned}$$

ここで, ${}_mC_i = 0$ ($m < i$) に注意すると,

$$\begin{aligned} xP_n(x+1) &= {}_nB_1({}_1C_0 x + {}_1C_1 x^2) + {}_nB_2({}_2C_0 x + {}_2C_1 x^2 + {}_2C_2 x^3) \\ &\quad + {}_nB_3({}_3C_0 x + {}_3C_1 x^2 + {}_3C_2 x^3 + {}_3C_3 x^4) + \cdots \\ &\quad + {}_nB_{n-1}({}_{n-1}C_0 x + {}_{n-1}C_1 x^2 + {}_{n-1}C_2 x^3 + \cdots + {}_{n-1}C_{n-1} x^n) \\ &\quad + {}_nB_n({}_nC_0 x + {}_nC_1 x^2 + {}_nC_2 x^3 + \cdots + {}_nC_{n-1} x^n + {}_nC_n x^{n+1}) \end{aligned}$$

すると, $xP_n(x+1)$ の展開式の x^{k+1} の係数は,

$${}_nB_k \cdot {}_kC_k + {}_nB_{k+1} \cdot {}_{k+1}C_k + {}_nB_{k+2} \cdot {}_{k+2}C_k + \cdots + {}_nB_n \cdot {}_nC_k = \sum_{j=k}^n {}_nB_j \cdot {}_jC_k$$

以上より, $\sum_{j=k}^n {}_nB_j \cdot {}_jC_k = {}_{n+1}B_{k+1}$ である。

[解説]

整式を題材にした論証問題です。(3)は, 証明すべき式の右辺 ${}_{n+1}B_{k+1}$ と (2) の $P_n(x+1)$ との関係を考え, $P_{n+1}(x) = xP_n(x+1)$ を見つけるのがポイントです。